資料３

日本学術会議

フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会

持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（第 24 期・第 7 回）

議事要旨

日時：　令和２年６月８日（月）10：00～12：30

会場：　ビデオ会議（zoom）

出席：氷見山、小松、鈴木、福士、窪川、谷口、花木、日置、山形、山口、小金澤、田中（以上委員）、及川、小林、丹羽、一瀬（以上オブザーバー）、薦田（事務局）

議題：

１）分科会に関係する国際的・国内的動向について

・地球研ではコロナ後の社会に注目した FE 関連の議論があるが、人材育成に関するものはほとんどない。

・5/27 に地球研も関係する"COVID-19 and Sustainability Transitions" というフューチャー・アース（FE）関連のオンラインのミニシンポがあり、アフターコロナのあり方が議論されていた。

・昨年テラスクールという FE アジア地域センターが主催する若手ポスドクを対象とする試みがあった。一週間京都で、超学際研究をどう進めるかを議論した。

・国際動向として、アドバイザリーカウンセルが FE の 5 年間を評価。新たな潮流・新たな活動は評価されたが、「独自の価値は何か」の再検討が必要とされた。運営体制についてもより価値を高められるように見直す努力が必要。その後はコロナで動けていない。

・COVID-19 下、ドイツで ESD への関心が高まっているようだ。UNESCO とドイツ政府が主催する ESD 世界会議（World Conference on ESD）は 2021 年 5 月 17-19 に延期。

・国連大学が ESD プロジェクトを加盟 48 大学にて調査。COP29 も延期。

・AASSA(Association of Academies and Societies of Science in Asia)から原稿依頼。テーマは ”Current Practice and Issues for Improvement in STEM education”。期限が迫っていることから執筆を急ぐ。参考情報があれば提供して欲しい。

・これは韓国が主導している。K-12 school ということは幼稚園からの 12 年間。将来像を語れる人はなかなかいない。STEM＝Science, Technology, Engineering, Mathematics。

・最近は STEAM に。A は Art。Technology と Engineering の区別もはっきりしない。

・これまでの日本の教育体制の枠にうまく収まらないが、深い問題を提起している。

・日本 STEM 教育学会もある。文科省も STEAM の重要性に注目。

・「新学習指導要領の実現と STEAM 教育について」が昨年議論された。資料取り寄せ可能。

２）「学術の動向」７月号特集「学校教育と ESD、SDGs、フューチャー・アース」について
本特集のゲラに沿って内容の概要を紹介し、確認した。

・鈴木：「ESD/SDGs の新たな展開」

・及川：「ESD/SDGs を実践する視点と戦略」：ESD（Education for Sustainable Development）の E は SD 実現のための Education 全体であって、SDGs の 4 番だけではない。海洋からの SDGs への多角的アプローチ。地域課題をカスタマイズする重要性（大牟田版 SDGs）。教育の目標を「自己実現型」から「共生・共創型」へ転換することが重要。

・佐々木：「小学校における ESD/SDGs」：子供達に気付きを生むことの重要性を強調。

・硤合：「スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組みを生かす」：学校教育における国際人材育成の事例。

・日置・丹羽：「海洋教育における教材開発とその意義」：海洋教育は明治期から商船、造船、水産、海上保安、海洋気象等が扱われてきたが、平成になって海洋保全、ESD, SDGs と深く関わるように変化。2007 年には海洋基本法が成立。海洋教育が定義された。新たな教育が今年から小学校、来年から中学校、再来年から高校で始まる。現状は社会でのみ取り扱われ、理科での扱いが弱い。理科の実験で学ぶ。気仙沼市教育委員会との協働の紹介。

・小川：「マイ・ウニ飼育から海を学び、考える」：長期飼育から生命の大切さを学ぶ。受精→幼生→稚ウニ放流まで。磯焼けの問題は重要。ウニが増えすぎることの問題意識も必要。放流と藻場保全の問題などもある。

委員長：本小特集全体で 1 ページ資料を追加できるので、良い案があれば至急知らせてほしい。

３）シンポジウム等の開催について

・産業界や行政も巻き込むことが必要では。

・COVID-19 下で国際的にもオンライン会議が増えた。

・オンラインなら地方の現場の先生も出やすい。やることにしてはどうか。

・学会のオンラインシンポもうまくいっている。

・国際会議はここ 3 か月ほど専らオンラインで行われているが、ロンドンやニューヨークなど大きな費用がかかる所に行かなくても参加できることのメリットは大きい。

・学術会議の方針を確認する必要がある。①9 月までに対面型分科会は可能か、②集会はすべて zoom か、一部会場併用も可か。→事務局：予算的には 9 月までにあと 2 回の分科会開催は可能。他は確認の上後日回答する。

・分科会主催でワークショップかシンポジウムを開くことにし、今後はメールで議論を行い、委員長が計画書を纏め、事務局に提出することを確認した。議論は今週中に行う。

４）その他

分科会として、来期の活動の継続を希望することを確認した。